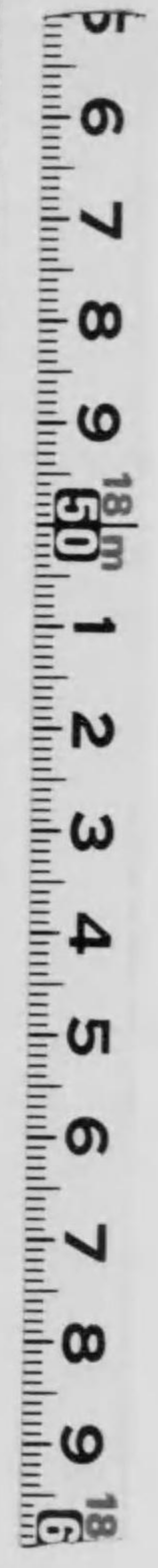


官幣大社稻荷神社御祭申記

11
362

國書藏
印



始



官幣大社稻荷神社御祭神記

11-362

582-41

後陽成天皇宸筆



福河五社大録

所賜于祠官羽倉延次

大正
9.7.23
内交



續古今和歌集

われたのむ人の願を照すこと

うき世にのこる三つの燈火

これは稻荷の大明神の御歌こなむ

後宇多天皇御製

續千載和歌集

いなり山祈るしるしのかひもあらは

杉の葉かさしいつか逢ひ見む

後西院天皇宸筆

稻荷大明神

所賜于祠官 羽倉延重

後醍醐天皇御製

吉野拾遺

むは玉のくらしき闇路にまよふなり

われにかさなむ三つのごもし火

順徳天皇御製

御

集

いなり山きのふの暮の夕つく日

さして千年のかけは知られし

靈元天皇御製

稻荷神社御法樂和歌

稻荷山杉のかさしも二月の

さらにをり得て今日や見ゆらむ

官幣大社稻荷神社略記

宮司正五位勳六等 岡部 讓 謹輯

當神社は、元明天皇和銅四年二月七日(初午)始て三箇の峰に御鎮りになり、稻荷社古今事實考證 嵯峨天皇弘仁十四年始て社殿を造り奉り、西遊行囊抄

案に、是より前は御社殿は無く、御塚を御神座として祀たものでありましやう、その舊態は今尙多くの御塚に遺つて居ります、

醍醐天皇延喜八年左大臣藤原時平公御修造申し上げ 西遊行囊抄

案に、此の時今の奥の宮の地に遷し奉つたものご思はれます、

龜山天皇の弘長三年に御告が有つて、文永三年正月、田中社、四大神



の社を加へて五社ごなし奉りました、神祇拾遺然しながら、この両社は近衛天皇の久安年中から既に祀て来たものである事は明白であります。台記後花園天皇永享十年正月、將軍義教公の立願に依つて、今の社地に移して造營し奉りました、稻荷社古今事實考證其の後、土御門天皇應仁二年、戦亂の爲に焼かれまして、明應八年十一月三社御相殿に御造營を申し上げ、正親町天皇天正十七年八月關白豊臣秀吉公の立願で、今の御殿は御造營になつたのであります、同上さて又神階の正一位に御進みにならせられたは、天慶五年四月であります、白川伯家日記

御祭神は、衣食住の守神であらせられますから、古來朝廷の御崇敬殊に厚く、夙く延喜の式には名神大社と申すに成つて居ります、仁壽二年には止雨の御奉幣があらせられ、文徳實錄貞元二年七社の御奉幣以來六社八社などの御奉幣にも、いつも加らせられてあります、日本紀略

後三條天皇を始め奉り、天皇様の行幸が十三度、後白河法皇を始め奉り、上皇様の御幸が十四度に及び、皇后宮皇太子の御參拜も亦屢次あらせられました、さて明治四年五月今の官幣大社に列せられましたのであります、

謹みて御祭神の御事歴を記し奉らむに、宇迦之御魂大神は(中央下社)姫神であらせられて、稚産靈神の御子であります、古事記 この神の御名を、豊宇氣毘賣神、保食神、大宜都比賣神、若宇迦能賣神、豊宇賀能賣神、大御膳神、延喜式、御鎮座傳記、倭姫命世記 なごご申して、伊勢外宮に祀らせらるゝ大神と、御同神であらせられ、その御神徳廣大無邊で、まづ五穀も蠶もこの大神の御身より成り出で、その他、人の身體を養ふ食物は、皆この大神の御靈を蒙らぬものは無いのであります、宇迦は、宇氣と同じで、宇は添へ言で、迦は氣と同じ言で、食といふ

義であります、今でも一食二食を、ヒトケ、フタケ、こいひます、氣を迦かこいふは、酒さけのケを下したへ語ことばのつゞく時は、サカ屋、サカモリ、なごかこいふと同じであります、古史傳 されば宇迦之御魂大神ウケノミタマノカミと申すは食けの御靈ミタマの大神オホカミと申すことで、御靈ミタマこいふは、御たましひ、即御本尊ソノミタマノホンソノと申す事、御功德ミコトクを賞ほめて申したのである、又保食神ウケモノノカミと申すは、食物けものを持ち掌つかさる神、豊宇氣比賣トヨウキヒメと云ふも、豊は美稱ほめた言で、やはり食物けものの神カミと申す意こころであります

偕とも又この大神オホカミの分靈わけたまの神カミが、二柱ふたはしらあります、その一柱ひとはしらを、久久能智神ククノチノカミと申して、木の祖おのの神カミで、諸もろの木きは悉ことごとくこの神カミの御功德ミコトクに因よりて生なり出いで、他ほかの一柱ひとはしらを、萱野比賣神カヤノヒメノカミと申し、これは草くさの祖おのの神カミで、諸もろの草くさは皆みなこの大神オホカミの御功德ミコトクに因よりて生なり出いたのであります、延喜式、古史傳 そも、この大神オホカミの御功德ミコトクの顯あらわしましたのは、須佐之男命スサノヲノミコノミコトの荒あびに依より

て、御亡おのなりになつた時に、その御體おのからだから、穀物こくもつの種たね、又蠶かひこなど出來て古事記ふること記それを天照大神あまてらすおほみかみが、御取おとり寄よせになり、御覽おんらんなされて、この物等ものらは、顯見あきしき青人草あせひとくさ（人民じんみんの事こと）の、食くひて活いくべき物ものぞと、仰おほせられ始めてその穀物こくもつをお殖うゑさせになり、又蠶かひこの絲いとを紬つむいて、衣服きものとする事を始められ、日本紀 住居すまいは木きにて造つくり、草くさにて葺ふき、木綿もめん、麻あさ、絹きぬなど、皆みなその神靈かみたまによつて、出來たもので、實じつにこの大神オホカミは、食物けもの、衣服きもの、住居すまいの神カミであらせられ、吾々人間われぐにんげんの、一日いちにちも缺かくべからざる大切たいせつの物ものを成なし出し給たまふた大神オホカミであります、

さて皇孫くわうそん邇々に藝命ぎのみことを天降あまたし給たまふ時に、その豊宇氣毘賣神トヨウキヒメノカミの御神靈ミコトク、古事記 又齋庭さいていの穂ほと云つて、大御神オホミカミの御田ミタで出來た稻穂いなほを御授おたまけになり、これを氣候きこう順當じゆんたうなる御國ミクニの良田よいたへ殖うゑさせられた處、その稻穂いなほが八束やつか穂ほと大きな穂ほが出て、よく豊熟みづかつた故ゆゑに、吾國われくにの一名ひとを瑞穂國みづほのくにとも申

すのであります、日本紀

本居宣長翁は「天皇に神の依せる御歳をし、飽までたべて在るが樂しさ、」詠まれました、これは、吾が天皇陛下に豊受大神の、御授け下された米を、吾等までも飽まで食へて居るのが、楽しいといふのであります、又「朝夕に物くふごこに豊宇氣の、神の恵みを思へ世の人、」詠まれたのも、誠に然ることでありますれば、能くこの教を守り、この大神の御功德を尊びまつるべきことであります、玉梓百首

儲また衣服の始めは、この大神の御骸に出来た蠶と桑木とを、天照大御神の作り殖ゑさせられ、其の絲を紬いで、天棚機姫神と申す神に和衣を織らせ、天日鷲命と申す神に穀の木の皮を以て白布を、長白羽命と申す神に麻を以て青布を織らせられた、これを荒衣と申します、上代の衣服はこの和布荒布の二種であります、古語拾遺

又人の住居は、木で造り萱で葺くが、神代に始められた構造で、その木も萱も、この大神の分靈によつて出来たものだから、古昔は家を造へて移徙の祝をするを新室壽と云つて、上下共にこの大神を祭つたもので、其の時にはこの大神を、屋船命と申します、屋船とは屋骨と云ふ事であり、日本紀、延喜式又この大神は、家宅を御守護り下さるに因り、古は宅神と稱して、毎年四月と十一月の一二期に、この祭をいたし、野府記、奥儀抄、權記、小右記、夫木和歌抄等 後世に至つては家祈禱と云つて正五九の三月に、この祭をするこゝとなりました、

かくの如くこの大神は、食物、衣服、住居の事の本を守り給ふ、御神徳の廣大なる神様であらせられますから、天照大御神は、天下人民の爲に、重くお祭りなされ今も尙外宮の大神として、最重くお祭りになつてあるは、この所以であります、さればわが稻荷神社にても、中央

の主神おんしんとして、祭らせらるゝのであります、

○佐田彦大神さだひこのは、(北座中社きたのざなかのじや)又の御名を佐太大神さだのおほかみ 出雲風土記いづもふちのきにも、大土おほつち之御祖神のみおぢの延喜式えんぎしき、古史傳ふるしでんにも、申しまして、大歳神おほとせのの御子みこであります、古事記こじこの大神は、皇孫日子番能邇々くわんそひこはのににぎの藝命天降りうまのなさらむ遊あそした時に先驅せんくの神還かへつて白ますに、天之八衢あめのやちまた(方々はうはうへ分わかれ行ゆく岐まの幾いくつもあるをいふ)に脊せの長さ七尺餘ななせふたひの神居かみつて、上は高天原たかまのはらを光てるし、下は葦原中國あしはらのなかつくにを光てるし眼めは八咫鏡やたがひに似にたりと申しました、そこで隨從ずいじゆうの神等かみに、天神あまつかみの御言みこと葉はを含ふめ遣つかはして、その何神なにかみなるかを問はせられた時に、眼眩惑めくらめて對面たいめんするここが出来ぬ、と御答みこたを申し上げました、そこで天宇受賣命あめのうすめのみことは、射向いさかふ神かみに面勝おも神かみなりと申し、女ながら物に畏おそれぬ御氣性みこしやうであらせらるゝので、更にこの神を御遣つかはしになつて問はせられたに、八衢やちまたの神が答へて申すには、吾は國神くにのかみ、名は猿田毘古大神さるたひこと申す、此處こゝに出向いさか

ふ所以ゆゑは、天神の御子天降り遊ばすと聞いたから、啓行さきはらひを致いたさむために御出迎みでむかへするのであると申しました、天宇受賣命あめのうすめのみこと再び問ふて、汝きみ先に立ちて行くか、將我先はたに立ちて行くかと仰せらるゝと、猿田毘古大神さるたひこは我先はたに立ちて導みちびき申さむ、と答へられました、天宇受賣命あめのうすめのみこと又御問みとひなされて、汝はこれより何處いづこへ到いたり、皇美麻命すめみまは何處いづこへ御到みこなさらむかと仰せらるゝと、答へられて天孫の御子は、筑紫つくしの日向國ひむかくにの高千穂たかちほの穗觸くしごの之峰のに御到みこなさるべく、我はその峰のに導みちびき奉たてつて後に伊勢いせの狭さ長田なだの伊須受いす之川上のに參まゐらうと思ふ、我が名なこそその出迎いでむかへたる所以ゆゑを尋たずねて、顯あらはせるは汝きみなれば、汝は吾をその川上のに送おくつてくれよと申されました、これに因よつて天宇受賣命あめのうすめのみことは天孫命あまの孫の御前みまへへ還かへりて、猿田毘古大神さるたひこの狀さまを子細しさいに報告ほうこくせられました、そこで日向國ひむかくにの高千穂たかちほの穗觸くしご之峰のに御降臨みくだりあそばされました、日本紀よめふみこれより天宇受賣命あめのうすめのみことは皇美麻すめみま

命の勅命によりて、猿田毘古大神の御妻となりて仕へられました、日本書紀口訣、古史傳、この猿田毘古大神は、伊勢の宇治土公氏の祖先であります、神祇本源、さて又天孫は天宇受賣命のこの御功德を御賞なされ、猿女君といふ姓を賜はりました、古事記、これが吾國で臣下に姓を賜はる濫觴であります、氏族母鑑

又この大神は、殊に田地のここに御功德があるので、又の御名を大土之御祖神とも申すので、農家にありてはこの由緒によりて深く信仰するのであります、

○大宮能賣大神(南座上社)と申し奉るは、女神におはしまして、又の御名を天宇受賣命延喜式、古語拾遺とも、宮比神、建久年中行事、參宮嚮導記とも申します、天太玉命の御子であらせられます、古語拾遺

さて世人の普く聞傳へたるが如く、神代の古昔天照大神が御心に適は

ぬ事があらせられて、天岩屋へ御幽居なされて、世間は悉く晝夜の差別なく常闇となり、萬の邪神や妖鬼ごもが時を得たりと喧ぎ立ちました、それを八百萬神達が御心配なされて、岩屋戸より大御神を出し奉らねば、この妖氣は止むまいと種々に御工風なされ、岩屋戸の前に種々の物等を作り備へ、庭燎を焼き神樂を奏して、その音樂を恠ませ奉つて出御ならせやうと、神等それ／＼諸般の役を勤められました、さてこの神樂の時に、この大宮能賣大神は、天香山の日蔭の蔓(蔓草の名)を鬘りなし、眞拆の蔓(蔓草の名)を手纏にかけ、左の御手には手草と申して天香山の笹葉を束ねて御持ちになり、右の御手には鐵鐸と申す鈴を付け茅萱で卷いた矛を持つて、彼の岩屋戸の前に、宇氣槽といふ空洞の船のやうな物を伏せて、其の上で足拍子を取つて舞はれました、爰に八百萬神達は、樂器を合せて撃ち囃しますと、この大神は

いごも美しいお聲で、「ひごふたみよ、いつむゆ、なや、このたり、もちよろづ、御謠ひなされ、神懸こいつて憑物のしたやうに、熊こ可笑しく物狂はしく舞ひ踊られました、八百萬神たちその所作の面白さ可笑しさに堪えかねて、諸聲をあげて賞め笑ひました、案に違はず天照大御神は、此の大神の舞ひ踊り戯れたまふ俳優の、面白く聞ゆるを惟しご思召され、天岩屋戸を細めに明けて、御透見あらせられたを、手力男命こいふ神、遂に岩戸を引き開け、その御手を執りて、引出し奉り、かねて新に造り置きたる御宮に、御遷し申し上げて、闇黒であつた世の中再び照り明るく、彼の邪神ごもは悉く逃げ失せました、古事記、日本紀、古語拾遺、天孫本紀、年中行事秘抄、祀崇次第爰に八百萬神達犬にお悦なされて、面を見かはせるに、始めて明白に見えましたから、手を伸して歌ひ舞ひ、共に覺えず諸聲をあげて、天晴あな面白、あな手

伸、あな清明、於計こ申して、この大神の戯技を褒められました、古語拾遺さて又、右の御歌の、ひごふたみよ、いつむゆ、なや、このたり、こいふ詞の義は、人蓋を見よ、即人ごは神の事で蓋は岩屋戸であります、いつむゆは嚴つ萌ゆこいふことで、天照大御神の御威光が萌ゆる如く見はじめたこいふ事で、なや、このたり、は成れりや茲にて足れりこいふので、天照大御神の大御貌が現れたるを以て、出し奉らむこしたる謀は成れり、こゝで満足なりこいふこゝ、もちよろづ、は股乳宜して宇受賣大神の舞はれて、股乳を露しなされた状態が、よろしいこいふ事でありませ、古史傳參考又この詞はさるめでたい詞でありますから、數の名こして常に世人に唱へさするやうにしたものであります、是より後に、櫛玉饒速日命こ申す方を、天降しなされた時に、十種の神寶を下されて、もし病しき事があつたらば、この寶

を振つて、ひこふたみよいつむゆな、やこゝのたり、ご唱へよ、然う
 したらば死だ人も蘇生らむご仰せられて、人の體より離れ遊る、魂
 神を鎮めごゝむる、鎮魂祭といふ大切の神法を傳へられました、先代舊
 事本紀饒速日命この御法を行ひて、數百歳の壽命をお保ちなされ、後
 に神武天皇に御傳へなされたを、御代々の天皇陛下この御祭をお行ひ
 なされるに、この大神の御子孫の猿女君、うけ槽の上に立ち矛を持つ
 て衝鳴らし、聲高に此の御歌を唱へる事は、この時の由緒に據るここ
 は、古語拾遺(書名)に鎮魂の祭は天宇受賣命の遺跡なり、ごあるので
 明であります、然ればこの大神は、人の壽命を守りて長生せしむる御
 功德があらせらるゝのであります、
 さて天照大御神、既に岩屋戸を御出ましになり、更に新宮に御遷座申
 し上げて、此の大神その御前に伺候し、よく其の御心を取り申し、慰め

奉りて御伽を申しながら、御側の事をも執らせられますにより、御名を
 大宮能賣神とも、大宮比咩神とも申します、延喜式、古語拾遺されば古は
 高き卑き男女を問はず、宮仕へする人達は、毎年の正月と十二月この
 初午の日に、諸家で宮咩祭と申して、風雅やかにこの神を祭つたもの
 であります、延喜式、政事要畧、執政所抄、水右記、兵範記、等それで官公吏の
 人は勿論、一家の主人に仕へる人等、又は俳優、歌舞、音曲の道を以
 て業ごなし、或は商業等を行ひ世の愛敬を求むる人は、常にこの大神
 の御恩恵に預らむごを、日夕祈り申すべきであります、此の大神の
 又の御名の、天宇受賣命といふ天は美めた詞で、宇受は俗に云ふおそ
 いご同じで強悍猛固事をいふのであります、古語拾遺それに就ての御神
 徳は、前の佐田彦大神の處に申した通りであります、又宮比神と申す
 宮比は、此の大神は宮人の始であるから、宮人風といふ語をつめて

云ふたので、玉櫛そのみやび風は如何なる風をいふかご申すに、言語は申すに及はず、起居動作に自ら威儀具りて、優にやさしく、手足の過失なごあることなく、また自然に可笑しみありて、見る人之を愛し、君に仕へては、能く常の御心を推察して、事を調べ、或は餘の仕人など、君の御怒に逢はれた時は、美詞を以て和し参らせ、かつその仕人の君を怨み奉らぬやう言ひ直して仕へ奉らせ、或は君の鬱悒なごある時は、自然にその事の休まるやう、時により事に従つて、狂言綺語をも交へて、悦懌め参らせ、時には洒落滑稽なご申して、並居る人を動もし笑はすなご、これ皆眞の宮風ご申すことでもあります、玉櫛この神はさる神徳ある故に、宮比神ご申したのであります、

○田中大神(最北座田中社)は、大巳貴神ご大年神の二柱を申すので、稻荷神社考 大巳貴神ご申すは、俗に大黒様ご申上る、大國主神の又の御

名であります、御名の意は、大名持で御功德高く大きな御名を持つる、ごいふ事、古事記傳又一説には、一つの御功業に就て一つの御名を負ひたるので、御名の多きは御功業多きわけで、此の大神も國土の御主宰ごしては、大國主神、宇都志國玉神、御勇武に對しては、八千矛神葦原醜男神なご申上ます、此の大神は須佐之男神の御子で、大年神ごは御兄弟であらせられます、古事記この大神は、幽冥主宰の大神で、すべて目に見ぬ神の世界の事を御掌りになり、總て人間の禍福を御掌りあらせらるゝに因り、俗に福の神ご申上ます、大年神は、稲作の事を守り給ふ神で、稲の事を年ごいふは、田寄ごいふ詞の約りで、田は神様が天子様にお寄せ御授け下さるものごいふ意味であります、古事記傳一年の年も、それから出て、稲の春蒔き冬收穫るゝもので、一年かゝる故に年ご云ひます、米の澤山取れたを豊年ご云ひ、支那でも豊熟なる

を有年りと云つて居ります、

○四大神(最南座四大神)は、若年神、夏高津日神、秋比賣神、久々年神の四柱であります、稻荷神社考四神共に、羽山戸神と申上る神の御子で、羽山戸神と申すは、大年神の御子であらせられます、古事記若年神と申す御名は、御祖父神の大年と同じで、御年代の關係で若と申したのでありまじやう、夏高津日神は、又の御名を夏之賣神とも申し上げ、稲作の發育成り立つ義で、秋比賣は同赤らみ熟する意味、久々年は莖年で、稲の莖の延びたつ意で、共に稲作を守り給ふ御功德を申したのであります、いづれも御血縁も、御功德も、他の神々と深き關係のあらせられる處より、御祭り申したものでありまじやう、御縁故深き松尾神社(御父神羽山戸神の兄神、大山咋神は松尾の御祭神であります)七社の中にも、四大神と申して、この四柱の神を御祭りになつてあり

ます、

以上叙述たる如く、五社九柱の大神、夫々特殊の御功德ありて、今之を概括て申せば、人生の最も大切なる衣食住百般の事、又これに伴ふ土地農蠶其の他航海貿易に對する、水陸道路の安全、商業及一家親族知己朋友等、交際に關する相互和合の福利に至るまで、汎く守護し給ひ、又事ある時は、武勇、糧食、統御、納降等を知らしめす、廣大無邊の御神徳まして、前にも申したる如く、往古より朝廷の御崇敬最も篤く後陽成、後西院の兩天皇よりは、稻荷五社大明神の宸筆をも賜はり(卷首に掲ぐ)世人の尊信も亦ますます重きは、實にこの御神徳の感應顯著なる所以であります、

年内祭典略記

一月一日

歳旦祭 新年を祝つて初日の光と共に 皇威の益々輝かむ事を壽ぐお祭であります、これより月々の一日にもお祭があります、

同 三日

元始祭 萬世一系の御皇統の大元始を壽ぎ、君ご國この御繁榮を祝ふお祭であります、

同 五日

大山祭 今日早旦山上の神蹟七ヶ所に瑞繩を張ります、それ故御瑞繩張ごも申します、
往昔山上に御鎮座の時、御膳ヶ谷で御神饌を供進げた例に依つて

百枚の耳土器に中汲酒を容れ、御膳ヶ谷の神供所に奠げます、それに御仕へした神職一同、日蔭蔓を襟に懸け、杉の小枝を頭挿し山上の各神蹟を巡拜するのであります、この土器は酒性を良くし水質を清ます靈験がある云つて遠近より群参し争ひ取つて歸ります、

同 十二日

奉射祭 御弓始云ひます、神幸道西側の射場に、大的を掛け、左右に白木の神弓及矢を飾り、射手の神職二人で箭を一手づつ射て直會の式があります、この神弓及矢は盜賊除の靈験がある云つて尊重します、

二月初午日

初午祭 和銅四年の二月七日、初て稻荷山に御鎮座の日が初午で

ありましたので今も此の日にお祭を行ひます、月々の初午の日にもお祭があります、

同 十一日

紀元節祭 神武天皇様の大和國の畝傍の橿原の宮に御即位あらせられた日をお祝ひするお祭であります、

祭日府廳撰定

祈年祭 天皇陛下が人民の爲に年穀の豊登をお祈りあそばし、御神饌御幣帛を御供進あらせらるゝお祭で三大祭の一であります、

四月 九日

例 祭 年内一度の大祭で、朝廷より御神饌御幣帛を供進あらせられます、三大祭の内の最重要のお祭であります、

同 第二午日

神幸祭 前日五基の神輿を拜殿に列ね奉り、當日午前御神靈を神輿に遷し奉り、各神寶を捧持ち、鹵簿を整へ神職一同供奉し、田中社、上社、下社、中社、四大神といふ順序で、順路西九條の御旅所へ神幸になります、其の壯觀云ふばかり無く、俗に御いでまつりといひ、京都年中行事の一であります、神輿は金銀の彫鏤美術の粹を極めたもので、皇太子殿下英國コンノート殿下等の台覽もありました、

五月 第二卯日

還幸祭 西九條の御旅所より本社へ御還幸の祭であります、鹵簿は略神幸の時の如であります、當日神殿の御簾に、葵桂を懸け奉り、奉仕の神職始供奉員一同葵桂を頭挿します、

八月 三十一日

天長節祭 今日は今上天皇陛下の御降誕の日でありますから、それを御祝ひ申すお祭であります、

十一月八日

火焚祭 庭燎を焚いて行ふ神事であります故火焚祭と云ひます、昔三條小鍛冶宗近といふ者靈験を蒙つて名刀を鍛錬た事があるので、鍛冶を始すべて銅鐵金銀杯の職工が尊奉します處から鞆祭とも申します、昔は今夜朝廷から御神樂の御奉納がありました、今も尙その例を傳へて御神樂があります、

祭日府廳撰定

新嘗祭 二月の祈年祭の御奉賽で、新穀を奠へて御祭をいたします、朝廷より神饌幣帛料の御供進がありまして、三大祭の一であります、

十二月上申日

煤拂祭 内外陣の御煤拂のお祭であります、

同 三十一日

除夜祭 一年を無事に経過したるこの喜を申しあぐるお祭であります、

大正九年七月五日印刷
大正九年七月十日發行

(非賣品)

著者兼
發行

岡

部讓

京都府紀伊郡深草村
大字福稻字西ノ内第五十五番地

印刷者

横江重太郎

京都市下京區河原町通
四條南入順風町三百十三番地

印刷所

西井印刷所

京都市下京區河原町通
四條南入稻荷町三百二十三番地

11
362

終

